

のものにまとめあげたことは、結果はともあれ、それ自体貴重な経験であった。

暖地園芸農業の地理学的考察

— 渥美半島表浜地区の場合

伴 晴子

戦後農村は着しく変化したといわれる。これには二つの面が考えられる。一つは農地改革による土地所有関係であり、それに伴う農村社会の近代化である。他の一つは科学技術の進歩により品種の改良、栽培技術の進歩によって農業それ自体が変化したことでこれによる農業生産の改善は前者とも密接な関係をもっており相互作用をしていることは自明のことである。

渥美半島は戦後の農村近代化の最も着しい地域で以前は奥渥美といわれるように後進地域の一つであったものが近年急激な発展を遂げつつある。それは花卉及び蔬菜を中心とした特殊農業の存在であり、漁業から養蚕、養鶏を至って現在の園芸農業に至るまでの発展過程によるところが大きい。

これらのことより研究の焦点を園芸農業におき、自然的、人文的因子がどのように作用しているか。最も顕著に現われた土地利用の一形態として（これは太平洋沿岸の岬端性暖地にはその類似性を求めることができる。例えば、房総半島、伊豆半島、紀伊半島などある）その地理学的な考察を行い、地域性の把握を目的とした。

従って地域の選定には、最初から郷里の近くでもあり、最近農業の面でも観光の面においても脚光を浴びている渥美半島を調査したいと考えていたので、この場合は最終的な段階のもので、境界線をどこにおくかであるが、幸い、暖地性利用の農業であるために表浜に集中して、赤羽根町と渥美町伊良湖地区に大体限られているため、調査の便も考えて、行政区画で上記のように設定した。

調査至過を記すれば、この地域の特殊性は園芸農業にありという仮定より出発したので、先づ、園芸農業の他地域のそれとの比較を行い、全国的な位置づけをすることから始めた。具体的には市場における競合関係を調査したり、他地域のそれに関する文献をあさりなどして、大体のものが把握できてから実際の地域調査に移った。

第一章では地域の概観として調査地域の自然的環境及び人文的環境の大体を記載した。地域の沿革は主に資料、文献と地元の歴史家といわれる方々にお聞きしたものをまとめた。気候は主題である園芸農家の根本的成立要因で

もあるので半島の裏浜（伊良湖岬測候所）と表浜（和地試験所）を比較しながらまとめたが、気温が特に表浜で高いのは微気候的立場で更に深く追求すべきかもしれないが、それには気象学的研究の範囲であると考え、又、力も及ばず、黒潮と山地の南斜面との間に生ずる微気候的なもので久能山のそれに類似しているまでにとどめた。

地形に関しては本論に与えられた課題であるため、地形図と空中写真によって地形区分を行い、各地形区の記載を行った。しかし、地形区分は元来何らかの研究の手段として使われるものであるがこの場合、地域の現在の姿の偏見的理解をさけるのに役立つように思われる。

土地利用ではその変遷と現在の土地利用を各地形区別に記載した。

第二章では第一章の土地利用で最も *dominant* なものは農業であることより出発して、農業の中でも更に支配的なものは園芸農業であり、これを中心に分析し、この地域の農業の特色とした。従って調査の際の仮定を逆から裏付けるという方法をとった。園芸農業は温室における日照菊とメロン、露地における花卉栽培、蔬菜園芸と三区別した。これは起源や発展過程も異なり、その比重の占め方によって部落別の特色も現われることをみて区別し、詳細に記載したつもりである。これらは文献その他の資料は少なく現地調査にそのほとんどが基いている。

タバコ、落花生、穀物などを園芸農業の支えとしたのは独断的のようであるが実際の商品化率及び収益性、農家経営における重点のおき方などを考え合わせた結果、以前においては異なっていたかもしれないが少なくとも現在はそうであるとして過言ではないと思う。

園芸農業の立地要因としては自然的なものとして気候、地下水、土壌を人文的なものとして歴史的なもの、交通、市場性、農民の意欲などが掲げられるがこれらは個々に作用しているのではなく総合的に相互作用も含めてこの地域の園芸農業を成立せしめたのである。

第三章では日本農業における園芸農業の位置と類型区分をして、この地域の園芸農業の総括的把握をして、問題点と今後の動向では市場の要求に従って合理的な経営が行われるならば今日の発展は更に拡大されるであるとし、それには国の総合開発計画（天竜東三河）が実施に移されているのをみても期待は大きいと考えた。